

Ⅲ 継承

～ Inheritance ～

校歌に込められ 受け継がれてきた先人の教育理念を「いま」と「これから」に繋ぐ

鳥沼小学校校歌

本校の校歌は隠れもしない歌人にして初代校長、小田観蛭氏の詞によるものである。氏は10年にわたって本校教育の基礎を築かれ、長年温められた教育の理想を慎重に作詞され、校歌として書き贈られたのである。

当時、すでに地域は開発整備を終了し、鳥沼公園の一郭に、世の厳しい現実にも耐える子どもたちのための国の子寮が建てられて7年目となり、世間の耳目を集めていた。故にこの校歌はひとり作詞者観蛭氏の理想だけではなく、学校と地域挙げての理想であり、真に鳥沼小学校の象徴として生まれたといつてよい。

「希望に燃える鳥沼の子ども」と謳われてきた「希望」とは、時代や社会の相違、また個人の生い立ちや境涯を超越し、一人一人をその願いに向かわせる営みを表す。そのねらいは、本校に通う子どもがそれぞれに自分を生かす希望をもち、それを支えとして明るく粘り強く、月々年々に主体的に自らの問題を解決でき、豊かな生活力を養い、人と円滑に協調していける立派な社会人へと成長することにある。また、「もえる」とは一人一人の不公平とも思えるような厳しさにも耐えて、根気強く堂々と自ら励み抜くこと、さらに「鳥沼の子」とは、心にしみる鳥沼の自然と、学校の温かい伝統に親しみ、地域の人々をはじめ、誰からも信頼される大事な一人であることを踏まえて誇りをもつことを希求したものである。

[昭和63年度学校経営計画より抜粋・改]

継承するゴール

学習指導要領前文の一節には、「一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにする」と記されている。校歌に込められた先人の思いは、百余年を経て、なお時の教育施策と合致をみているのである。このことを、本校の目指す教育の究極（＝継承するゴール）とおさえてイメージコンセプトを定めた。

本校が紡いできた歴史、紡いでいく歴史の一端を担う責任を自覚し、地域社会の付託に応えるため、「希望にもえる鳥沼の子ども」が体現された姿を、「ひとみはつねに かがやかし」の歌詞を受け「かがやくひとみ」と定めた。さらに、そこに連なる確かな学力・豊かな心・健やかな体の育成についても、歌詞をもとに構成した。

《継承するゴール（イメージコンセプト）》

かがやくひとみ

～希望にもえる鳥沼の子ども～

[あたまづくり] 進んでちしきをみがく子
[こころづくり] けがれぬこころをもつ子
[からだづくり] たゆまず体(たい)を練る子

Ⅲ 創造

～ Creation ～

来る時代の変化を捉え、子どもたちに社会を担う“智慧”を育む

めざす学校像

学校は、未来の創造者である児童に、社会との関わりのもとで自己実現を果たす力を育む場所である。言うなれば、将来を心に描き、社会と繋がり、人と共に高め合う術を体得させることに学校を置くことの意義がある。

質の高い教育を社会と共に創り上げ、成果を分かち合う営みの積み重ねは、よりよい学校づくりの王道であり、本校を“個々の教師力・学校の組織力・社会の教育力”を結集した“真の学校力”を備えた学びの場とするために、あるべき姿を次のようにおさえる。

■子どもにとって

[人と高め合う喜びを実感できる学校]

学校は 子どもどうしが安心感をもってつながり
互いのよさを確かめ合い 学び続けるところです

■教職員にとって

[人を育む誇りをもてる学校]

学校は 専門職の資質と矜持を備えた実践者が集い
協力し合って子どもを育むところです

■保護者と地域にとって

[人を育む重さを共に担う学校]

学校は 大人どうしがパートナーとして力を合わせ
子どもの成長の喜びを分かち合うところです。

創造するゴール

シンギュラリティ（AIの性能が人の知能を凌駕する日）の訪れは、決して遠い未来ではない。その時代にあっては、知識の集積は主にコンピュータが担い、人は知っていることを活用してどのようなことをすべきかを判断し、実行に移す役割を担うと言われる。現在本校に在籍する児童は、まさにそうした時代の直接の担い手となる。教育を通じて育まれるべき資質・能力については、富良野塾主宰 倉本聡氏の述べるところの「知識（何を知っているか）」から「智慧（何ができるか）」へとパラダイムシフトが求められているのである。

本校においては、その要は「人とつながる力」にあるとおさえた。

富良野に育つ、知育・情意・健康の三本の木は、めざす学校像として先に述べた、“社会（人）との関わりの中で自己実現を果たす力”を構成する大切な要素である。このことを「創造する教育理念」とおさえ、先の「継承する教育理念」に重ねる。この教育重点目標は、児童の育成に関わる教職員・保護者・地域社会が共有すべきゴールである。

《創造するゴール（教育重点目標）》

キーワード【一樹之陰（いちじゅのかげ）】

たがいのよさを確かめ合い、生きる力につなげる子どもの育成

～ 自分とつなぐ・仲間とつなぐ・社会とつなぐ ～

- 一樹の陰（いちじゅのかげ）のころとは：教育重点目標の根本にある哲学
あらゆる出会いは偶然ではなく必然であると考え、互いの存在を認め合おうとの意である。
人と人（児童・教職員・保護者・地域）が互いのよさへの気付きをもち、関わり合ってこそ、
児童に「生きる力」を育むことが叶うと考え、このことを教育重点目標に盛り込んだ。
- 自分とつなぐとは：学習の達成感を味わわせ、自己肯定感・他者肯定感を育む
人とよりよくつながるために、自身のよさや特性への気付きをもたせる。自身のよさに目を
向ける体験は、他のよさに気付く原動力となる。
- 仲間とつなぐとは：自学び合いの充実を通じて己有用感・他者有用感・相互有用感を育む
集団の中で自分のよさを生かしながら共通の目的に向けて協働することや、一人一人の存在
の大切さへの気付きを持たせる。互いのよさへの気付きは、一人一人が仲間としてかけがえの
ない存在であることへの気付きにつながる。
- 社会とつなぐとは：学びを将来に生かす意識を醸成し、生きる力を体得させる。
学校での学びは、社会とつながり、社会で生かすことができこそ「生きる力」となる。
最も直近の社会＝中学校生活の充実を念頭に置き、確かな学力・心力・体力を体得させる。

